

西都市教育研究センター

目 次

I	研究主題と副題	10-1
II	主題設定の理由	10-1
III	研究目標	10-1
IV	研究関連図	10-1
V	研究内容	10-2
1	さいと学研究班	10-2
(1)	これまでの取組と方向性	10-2
(2)	授業づくりの実際	10-2
ア	単元計画の見直し	
イ	課題設定の工夫	
ウ	キャリア教育の視点を踏まえた授業	
2	学力向上研究班	10-4
(1)	ICTの活用に関する実態調査	10-4
(2)	ICTを活用した授業づくりへの取組	10-5
(3)	「ジャンプアップ西都」の整備	10-6
3	英語教育研究班	10-7
(1)	中学校における英語科学習に対する意識調査	10-7
(2)	既習事項の効果的な定着のさせ方	10-7
(3)	学習内容をしっかり身に付けさせる授業の在り方	10-8
VI	成果と課題	10-10
○	研究同人	10-10

I 研究主題と副題

『教育ブランド西都』の具現化を目指して
 ～「さいと学」「英語教育」「学力向上」の取組をとおして～

II 主題設定の理由

本市は、教育基本法の理念と西都市民憲章の精神及び第10-1次西都市総合計画（前期基本計画：平成23～27年度）を基調として「『たくましいからだ 豊かな心 すぐれた知性』を備え、郷土に対する誇りと国際感覚にあふれ、新たな時代を切り拓いていく気概をもち、心身ともに調和のとれた人間の育成」を目指している。

その具現化に向け、平成21年度より、すべての小中学校が教育課程特例校の指定を受け、「『教育ブランド西都』の創造」をキャッチフレーズに、市内二校の県立高等学校とも連携し、全市を挙げて小中高一貫教育に取り組んでいる。

現在小中学校では、三納及び三財、銀鏡・上揚の三地区が施設一体型一貫教育校へと移行し、他の地区においても連携型一貫教育により地域に根ざした特色ある学校づくりを進めている。

また、平成25年度には全学校にICT機器（大型デジタルTV、実物投影機等）を整備し、ICTを活用した授業づくりによる学力向上を目指している。

『教育ブランド西都』の具現化にあたっては、本センターもその一翼を担い、市教科等研究会や宮崎国際大学と連携を図りながら、研究実践に取り組んでいるところである。本年度は昨年度までの課題を踏まえながらも、継続研究を念頭に置き、以下の三つの視点から研究を実践・深化させていくことが『教育ブランド西都』の具現化につながると考え、本主題を設定した。

－研究の視点①－

文化遺産等の豊富な教育資源を有する西都市の良さに気づき、『さいと学』を通して、ふるさと西都を愛する児童生徒を育成する。

－研究の視点②－

小学校1年生から導入している連続性、一貫性を重視した英語教育を通して、国際人として活躍できる児童生徒を育成する。

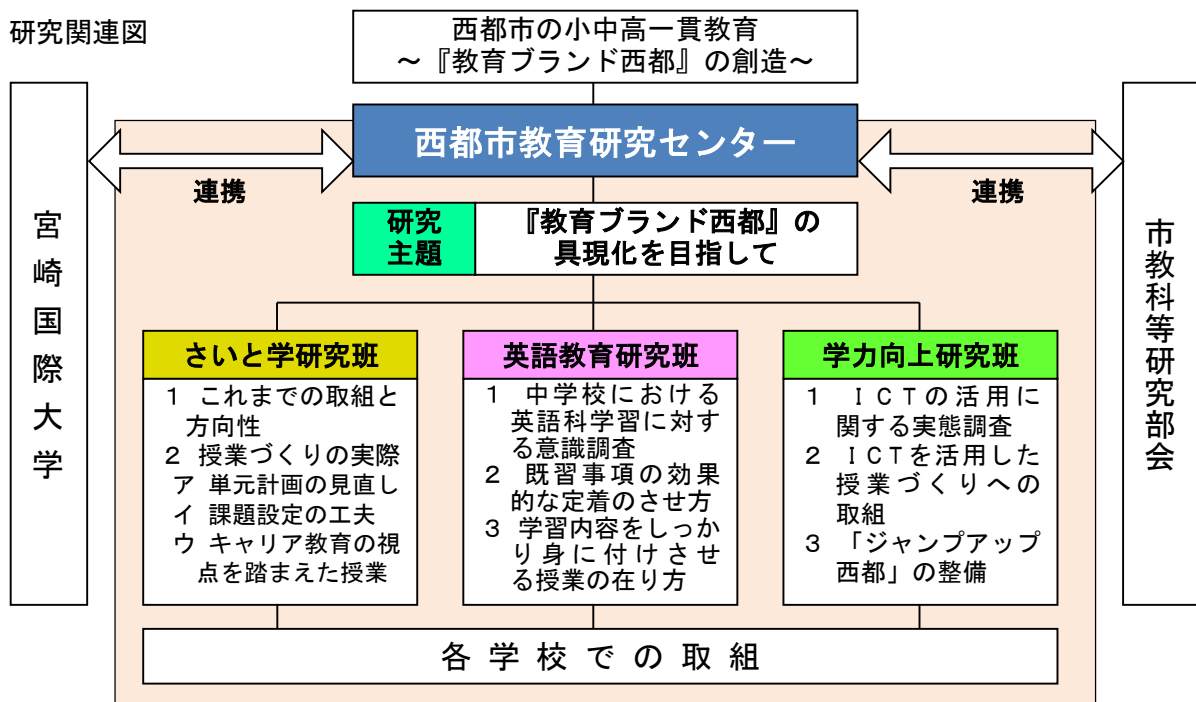
－研究の視点③－

視点①、②の基礎となる確かな学力を身に付けさせる。

III 研究目標

- 一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てるキャリア教育の視点を踏まえた「さいと学」の研究を通して、ふるさと西都を愛する児童生徒の育成を目指す。
- 英語教育の充実に向けた組織間の連携強化を図るとともに、学習内容や指導方法、評価の在り方等について工夫改善することにより、国際人として活躍できる児童生徒の育成を目指す。
- 児童生徒の学力向上に係る小中で共同実践できるICT等を活用した授業づくりの研究を通して、確かな学力の定着を目指す。

IV 研究関連図



V 研究内容

1 さいと学研究班

「さいと学」とは、西都市を学び、西都市を通して自分の生き方について考える学習である。児童生徒が、西都市の自然・環境、歴史・伝統、産業・生活など、西都市の教育資源を活用しながら学習し、その特色や課題を理解する。その学習の中で、自分を見つめ直し、西都市の未来や自分の生き方について考えることを通して、生涯にわたってふるさとを愛する心と態度を育てることをねらいとしている。

(1) これまでの取組と方向性

これまでの主な取組として、【資料1】のように児童生徒用のテキスト及び教師用手引書を作成した。

また、西都市教育研究センターホームページ（以下、「HP」という。）上で自由に利用できるデジタルコンテンツを作成し、さいと学についてはHPを見れば、教員が誰でも指導ができるように充実を図ってきた。

しかし、さいと学がスタートしてから7年ほど経過し、教員からは「学校の実情とあっていない内容があり、テキスト通り進めるのが難しい」、

「これまで以上に探究的な学習となるように充実を図る必要がある」、「キャリア教育の視点から、さいと学を見直してみてもどうか」などの声を聞くことが多くなった。

そこで本年度は、次の三つの視点を重視して授業づくりを行うこととした。

- ① 学校や児童生徒の実態を踏まえ、何のための活動かを見直し、単元を組み替える。
- ② 探究的な学習になるように、魅力的な課題を設定する。
- ③ キャリア教育の視点を踏まえた授業を実践することで、さいと学のねらいにせまる。



【資料1】 これまでの取組

(2) 授業づくりの実際

三つの視点を踏まえた授業づくりを目指すために、茶臼原小学校の5年生をモデルとして研究に取り組んだ。【資料2】は、授業研究会の指導案から抜粋したものである。

ア 単元計画の見直し



従来の計画では、米作りの単元計画が実情に合っていないことから、それまで年間 35 時間であった計画を 50 時間に増やした新たな単元計画を作成した。

イ 課題設定の工夫

5年生のさいと学は、米作りという体験中心の学習である。そのため時期に合わせた活動に追われる実情があり、探究型ではない学習になりがちであった。そこで、探究学習にするために、米作りという勤労体験を中心に据え、体験ごとに「働くということについて考える」という課題を設定し、話し合わせることで探究が連続していく単元計画となるようにした。

ウ キャリア教育の視点を踏まえた授業

お米を作るという体験は、楽しいことばかりではなく、つらい活動もある。そうしたつらい活動の体験を生かし、大人になると「どうして働くのか」や「自分は働きたいのか」についてじっくり考えさせ、話し合わせたいと考えた。そこで、実際に働いている大人の意見を聞きながら自分の将来の生き方を見つめさせる授業づくりを試みた。

段階	学習活動及び内容	指導上の留意点 (○) 及び評価 (☆)	資料・準備
導入 5分	1 前時の学習を振り返り、本時のめあてを確認する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px auto;">大人はどうして働くのかを考えよう。</div>	○ 前時の内容を簡単に振り返り、本時のめあてを確認する。 ○ インタビューしてきたことを発表してもらおうことを告げ、ゲストティーチャーの紹介を行う。	
展開前段 10分	2 インタビューしてきた内容を発表し、さまざまな職業についたきっかけや働くことの苦勞について知る。 	○ 各児童が持ち寄ったインタビュー内容を事前にチェックし、資料として準備しておき、発表させる。 ○ 現在の職業に就くことになったきっかけと働く時の苦勞について発表資料として準備させておく。 ○ どうして働くのか、どうして苦勞を乗り越えるのかについては、児童に事前に見られないように提出させる。	インタビューの報告用原稿 (各自)
展開後段 20分	3 様々な苦勞を乗り越えて大人はどうして働くのかについて考える。 ○ 討論1 ○ ゲストティーチャーの話 ○ 討論2 ○ 保護者からの手紙	○ 前段の「苦勞」をもとに「どうして働くのか」というテーマで討論する。 ○ 討論会の中でゲストティーチャーの職業選択のきっかけやどうして苦勞してまで仕事をするのかという話をしてもらう。 ○ 仕事をする理由はそれぞれ違うので、途中で保護者から届いた手紙を紹介しながら各々の思いについて考える。	ゲストティーチャー (保護者) 保護者からの手紙
終末 10分	4 授業を通して思ったことや感じたことを書き、発表する。 ○ 個人作業 ○ 発表 	○ 討論を通して持った感想をワークシートに書き、発表する。 ○ 仕事は、生きていくために稼ぐという考え方、家族を守るという考え方、自分のやりたいことを実現させるという考え方などあるが、どれか1つ答えを求めるというのではなく、今の自分の感じたことを素直に表現させる。 ☆ 「働く」ということの意味について自分なりの思いを持つことができたか。(思いとは、答えではなく、考えや感想、疑問、不安等、何でもいいので「働く」ということについて考える行為全般ととらえる。)	

【資料2】学習指導過程

<考察>

- ア 35時間を50時間に増やしたことで、時間に余裕が生まれ、活動の振り返りや次の計画を立てることができた。また、余裕が生まれたことで児童の実態をじっくり見ることができ、計画の変更や活動の改善を図ることができた。
- イ 体験の感想をもとに疑問点が生まれ、新たな課題をもとに話し合うことができ、子どもの探究心を持続させることができた。
- ウ 大人へのインタビューを行ったり、ゲストティーチャーとして身近な働く人を招いて話を聞いたりしたことで、それまで持っていた児童の価値観を揺さぶり、より深く自分の将来について考えさせることができた。

2 学力向上研究班

本市では、平成 25 年度に大型デジタルTVや実物投影機等の ICT 機器が市内全小中学校に整備された。そこで、本研究班は、ICT 機器の活用実態を把握し、実態に応じた効果的な活用に関する研究を行い、学力向上につなげていくこととした。また、昨年度までに整備を行ってきた「ジャンプアップ西都」も一部を改訂し、活用の促進を図った。

(1) ICTの活用に関する実態調査

ICT 機器の活用状況の実態を把握するために、市内全小中学校の職員にアンケート調査を行った。質問項目は、次のとおりである。

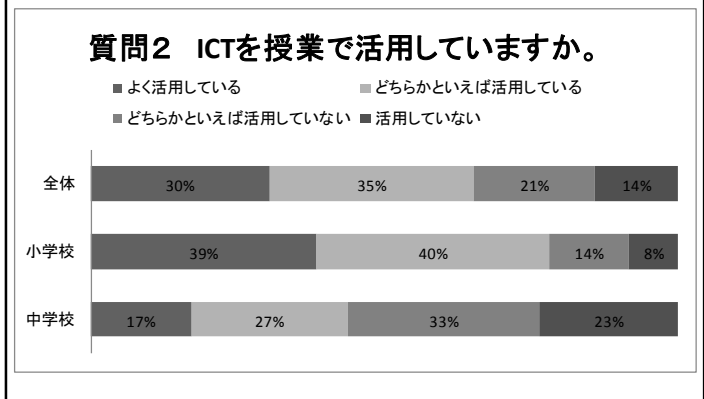
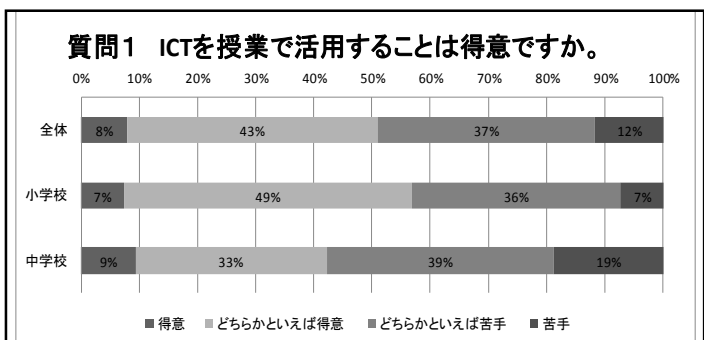
- 質問 1 ICT (実物投影機・パソコン・大型テレビなど) を授業で活用することは、得意ですか。苦手ですか。
 質問 2 ICT を授業で活用していますか。
 質問 3 ICT を活用することのメリットはどのようなことだと思いますか。
 質問 4 ICT を活用することのデメリットはどのようなことだと思いますか。
 質問 5 授業中、実物投影機をどのように活用していますか。
 質問 6 授業中、パソコンでどのようなコンテンツやアプリケーションソフトを活用していますか。

質問 1 では、肯定的な回答が小学校で約 6 割、中学校が約 4 割で、小学校と中学校での開きが見られる。質問 2 では、小学校の約 8 割が授業で活用できているのに対して、中学校では約 5 割にとどまっている【資料 3】。

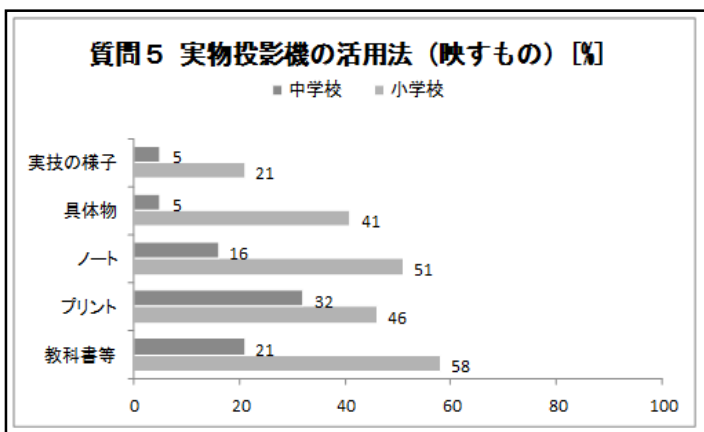
この実態の詳細を分析するために、質問 1 により「得意グループ」と「苦手グループ」に分けて分析を行った。質問 3 「ICT を活用するメリット」については、両グループとも「視覚に訴えることができる」「興味・関心を高めることができる」などが多く、同じ傾向が見られた。それに対して、質問 4 の苦手グループでは、5 割超が「機器のトラブルに対応できない」、「機器の設置が面倒」などのデメリットを挙げていた。

質問 5 「実物投影機の活用法」については、苦手グループの中でも活用しようとする姿は見られるものの、小学校と中学校での開きが見られた【資料 4】。

質問 6 「パソコンで使っているコンテンツ」については、使用割合が高い順に写真、動画、プレゼンテーション、ホームページであることが分かった。



【資料 3】質問 1、質問 2 のアンケート結果



【資料 4】質問 5 のアンケート結果【苦手グループ】

(2) ICTを活用した授業づくりへの取組

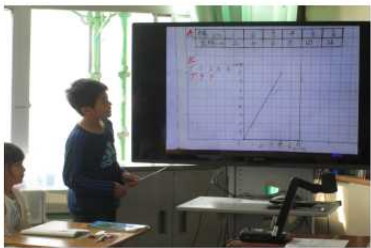

ア 効果的な活用方法についての研究

実態調査と合わせて研究員の所属する学校でのICT機器の活用事例を調査した。調査にあたっては、教科や単元、使用場面、効果などを具体的に調査した【資料5】。

調査した事例を学習指導過程の段階ごとに、次のようにまとめた。

導入の段階では、フラッシュ型教材で前時の復習を行ったり、問題提起や興味・関心を高めるために画像や動画を使用したりする事例があった。

展開の段階では、実物投影機を使った実験や作業手順の説明、動画や画像を使った学習内容の説明、インターネット上の動画クリップや教育ソフトの活用など、様々な工夫がなされていた。その中でも、ノートや具体物を使い、児童生徒が自分の考えを実物投影機で発表する活用事例が多く見られた。

<p>6年 算数 「比例」 使用場面 学び合う段階 効果 ・ 児童のノートをそのまま実物投影機で映し、画面を指さしながら説明ができる。黒板やホワイトボードに映す手間が省け、児童の思考の跡が残ったノートを活用できる。</p>	
<p>6年 算数「変わり方を調べて(2)」 使用場面 つかむ段階 効果 ・ デジタル教科書の挿絵を使って、問題の把握をさせる。教科書には解き方が示しており、この場面では見せなくなったため、テレビ画面で挿絵のみを活用。 問題場面のイメージ化に役立った。</p>	

【資料5】具体的な活用事例

イ ICT活用を普及させるための基本的な考え方

ICTに関する実態調査等を分析した結果、実物投影機の活用の有無が、ICT活用のポイントになっていることが分かった。また、研究員の所属する学校での具体的な活用事例の調査により、実物投影機を効果的に活用して成果をあげている事例も多くあることも分かった。コンピュータを使った授業については、写真や動画、教育ソフト等の使用コンテンツが、校種・教科等の違いにより、更に多岐にわたっている実態も見えてきた。その上で、ICT活用を普及させるための基本的な考え方を次のように整理した。

- ① ICT機器をすぐ使えるよう学校の状況に応じて配置する。
- ② ICTを活用した効果的な事例を整理し、市内全体で共有していく。
- ③ ICTをどの場面で、何のために使うのか明確にした授業づくりを行う。

そこで、初年度である本研究では、各校種・教科等に対応するため、実物投影機の活用と各校で同じ環境で使用できるプレゼンテーションソフトを活用した教材（以下、「プレゼン教材」という。）に絞り込むこととした。

ウ 授業研究会

実際の授業でICTの効果的な活用の在り方を検証するために授業研究会を実施した。（三財小中学校 中学部第3学年 数学科「図形と相似」黒木千穂教諭）

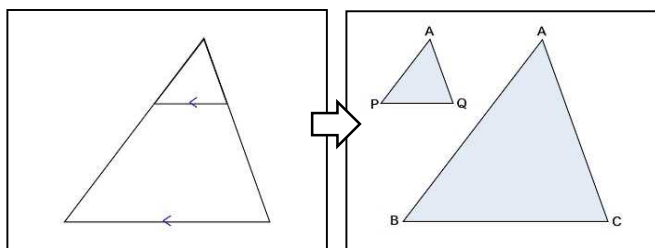
授業での導入・展開・まとめの各段階において、プレゼン教材や実物投影機を活用した。

プレゼン教材は、問題提示の場面で、相似な2つの三角形を見いだした後、重ならない位置に一方の三角形を抜き出して、対応する線分を捉えさせるために使用した【資料6】。実際に図形を動かすことで、対応する線分が明確になり、スムーズに比例式をつくることができた。また、まとめの場面では、相似な三角形の対応する線分を1組ごとに確認できるようにし、本時の振り返りでも再度提示して、対応する線分の位置を正しく理解させることができた。

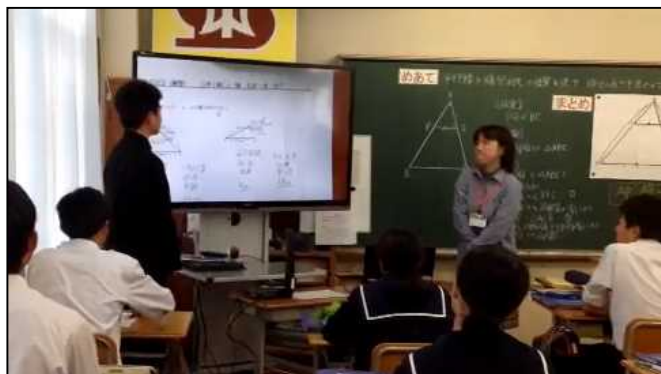
実物投影機は、解いた練習問題を生徒が説明するのに使用した【資料7】。実物投影機を活用したことで生徒は、自分のプリントをそのまま投影し説明することができていた。授業をスムーズに進める上で役立ったが、生徒の活用については、日常的に使い慣れる必要があることも課題として見えてきた。

成果として、生徒は意欲が高まり、集中して学習に取り組んでいた。また、終末の練習問題による評価から、アドバイスが必要な生徒は見られたものの、本時の目標は、ほぼ達成できていた。

機器の設置環境の面から見れば、デジタルTVの前に、実物投影機用の机を置いた設営であったが、準備が簡単でスムーズに授業に入ることができていた。中学校用の設営として参考になる事例である。



【資料6】使用したプレゼン教材



【資料7】生徒の実物投影機活用

エ 西都市教科等研究会情報教育部会との連携

西都市内各学校でのICT活用の事例を共有し取組を進めるために、西都市教科等研究会情報教育部会と連携し研修会を行った。ICT活用を苦手だと感じている教員に、実物投影機の活用、プレゼン教材の事例を提供できた。また、使いやすい環境づくりについて情報を交換することができた。

(3) 「ジャンプアップ西都」の整備

平成23年度から整備を進めてきた「ジャンプアップ西都」を改訂し、PDFファイル形式で、HPのメニュー「学力向上班」よりダウンロードできるようにした。「ジャンプアップ西都」とは、宮崎県教育委員会作成の「Web学習単元評価システム」の評価問題をもとに、学期ごとの学習内容を1枚のプリントに集約したものである【資料8】。

これにより、小学校1年生から、中学校3年生までの算数・数学の評価問題が整い、各学期の基礎的・基本的内容が1枚のプリントで振り返ることができるようになった。

今後、レディネスの確認やつまずきを見つけるための活用などの幅が広がることを期待している。



【資料8】「ジャンプアップ西都」の画面
「<http://cms.miyazaki-c.ed.jp/ssc019/htdocs/>」

3 英語教育研究班

これまで英語教育研究班では、英語活動（1年～4年）・英会話科（5年、6年）の充実のため、指導内容や指導方法、評価等の研究を行い、市内で共通理解・共同実践が図られつつある。また、夏季休業中に行われる「英語村 in 宮崎国際大学」（対象：6年）の計画・運営に携わってきた。宮崎国際大学の協力のおかげで、内容が年々充実し、児童が学んだ英語を実際に活用できるようになってきている。このように、小学校での英語教育の充実が図られてきたことから、本年度は、中学校での英語教育充実のための研究を行うこととした。

(1) 中学校における英語科学習に対する意識調査

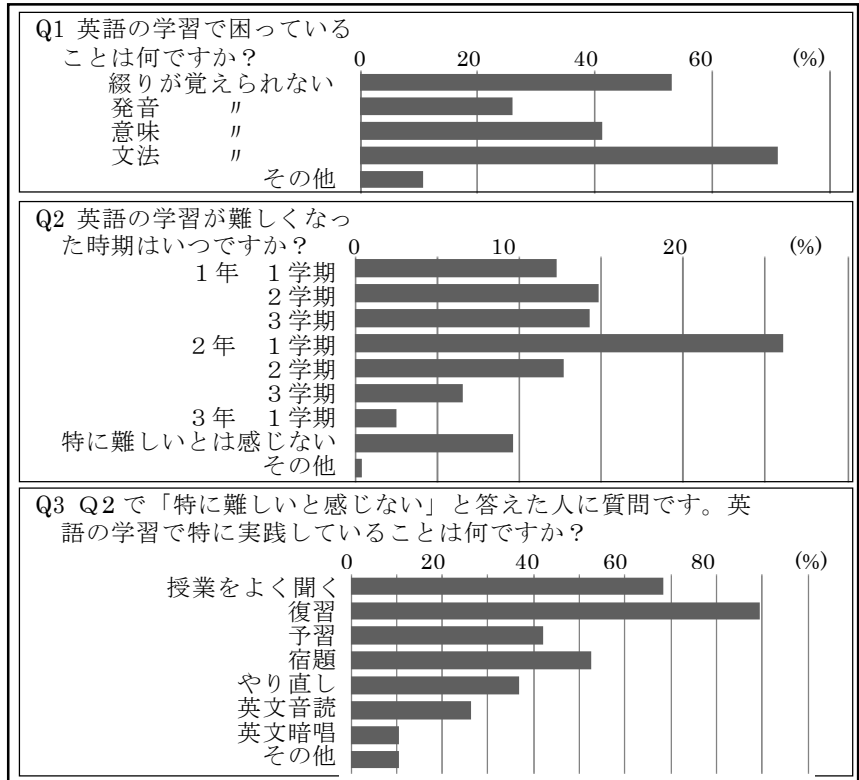
生徒の英語学習に関する困り感を把握するため、5月に市内の中学生にアンケートを実施した。【資料9】は、結果である。

この結果から、「文法を覚えることに困っている生徒が多い」「中学校の早い段階で難しくなったと感じている生徒が多い」「授業をよく聞く、復習をする生徒は、つまずきが少ない」ことが分かった。また、中学校英語科の研究員の意見から「生徒の学力差が大きい」という課題のある学校が多いことも分かった。

そこで研究内容を、

- ① 「既習事項の効果的な定着のさせ方はどうあればよいか」
- ② 「学習内容をしっかり身に付けさせる授業の在り方はどうあればよいか」

とすることにした。



【資料9】 英語に関する生徒へのアンケート結果（H26 5月 195名）

(2) 既習事項の効果的な定着のさせ方

既習事項の文法を効率よく定着させる教材として、平成25年度に作成した「Saito Basic Dialogue」【資料10】を活用することとした。

この「Saito Basic Dialogue」は、各学年の基本文法をA4で2枚にまとめている。さらに、宮崎国際大学の協力のもと、「英語（ネイティブ）」

おぼえよう 1年		
No.1	A: Hi, I am Yuki. B: Oh, you are Yuki. I'm Sam.	[2-1] A: こんにちは、私はユキです。 B: ああ、あなたはユキですね。私はサムです。
No.2	A: Are you a Tigers fan? B: Yes, I am. / No, I'm not. I'm not a baseball fan.	[2-2] A: あなたはタイガースファンですか。 B: はい、そうです。 / いいえ、違います。私は野球ファンではありません。
No.3	A: I like music. B: I like music too. I play the piano.	[2-3] A: 私は音楽が好きです。 B: 私も音楽が好きです。私はピアノをひきます。
No.4	A: Do you eat <i>sushi</i> ? B: Yes, I do. / No, I don't. I don't like <i>sushi</i> .	[3-2] A: あなたはすしを食べますか。 B: はい、食べます。 / いいえ、食べません。私はすしが好きではありません。
No.5	A: What do you study on Friday afternoon? B: I study English and Math.	[4-1] A: あなたは金曜日の午後に何を勉強しますか。 B: 私は英語と数学を勉強します。
No.6	A: I have a sister. B: I have two sisters.	[4-2] A: 私には姉がいます。 B: 私には姉が2人います。
No.7	A: How many bags do you have? B: I have five bags.	[4-3] A: あなたはカバンをいくつ持っていますか。 B: 私はカバンを5個持っています。

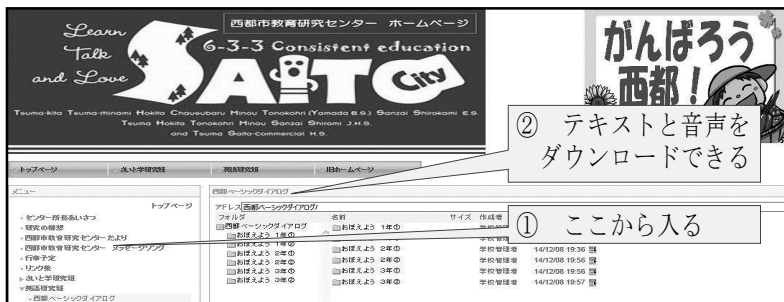
【資料10】 Saito Basic Dialogue（H25 西都市教育研究センター作成）

→ 日本語」の順に音声化したCDも作成した。また、テキストと音声のデータをHP【資料11】からダウンロードして利用できるようにした。

【資料12】は、Saito Basic Dialogue を用いた、検証の手順である。【資料13】は、授業での小テストの様子である。小テストの問題を本時学習内容と関連づけることで、より学習効果が高いテストになるようにした。

月	手 順
9月	① 事前テスト 対象 市内2中学校 2・3年生 139名 問題 Saito Basic Dialogue の1年内容
9月 ～ 11月	② Saito Basic Dialogue のプリント配布 Saito Basic Dialogue の C D 配布
9月 ～ 11月	③ 授業の初めに小テスト (5分程) 暗唱ペアテスト (2～3問ずつ) ↓ 1年の問題の暗唱が終わったら 書き取りテスト (2～3問ずつ)
12月	④ 事後テスト

【資料12】 Saito Basic Dialogue を用いた検証の手順



【資料11】 西都教育研究センター 英語教育班 Saito Basic Dialogue HP
「http://cms.miyazaki-c.ed.jp/ssc019/htdocs/?page_id=35」



【資料13】 授業での小テストの様子

(3) 学習内容をしっかり身に付けさせる授業の在り方

学習内容を生徒にしっかり身に付けさせるためには授業改善が欠かせない。普段あまり意識せずに組み立てている授業を再度見直し、授業における学力向上のための視点を整理した【資料14】。

- 1 指導内容を明確にする【指導内容】** ※【 】内は、指導案上に明記する際に活用した言葉である。
学習指導要領における指導事項の明確化、教科書での指導内容の明確化と、系統性の把握が、学習内容の確実な積み上げに重要である。
- 2 レディネスを把握し、高める【レディ】**
明確にした学習内容をもとに、児童生徒のレディネスを把握する。レディネスを把握することは、新しい学習を進める際の児童生徒のつまずきを想定することにつながり、単元計画や指導過程を立てる上で役立つ。
レディネスを高めることは、児童生徒のつまずきを減らし、学習活動に参加するための基盤となる。
また、新しい学習内容の理解と定着を図るうえで非常に重要である。学年が上がるほど、既習事項は増える。その膨大な既習事項の中の重要な内容を整理し、効率よく短時間でレディネスを高めさせる方策を教師がもっておかないと、高められない。また、整理したものを児童生徒に示すことで、効率よく復習することのできる家庭学習を行えるようになる。
- 3 問題解決的な学習の単元、指導過程での位置づけ【問題解決】**
指導内容や児童生徒の実態に応じ、問題解決的な学習を単元や指導過程に位置づけることで、児童生徒の興味・関心を生かし、自主的・自発的な学習が促されるようにする。その際、一部の児童生徒だけの活動で学習が進んだり、習熟の時間の確保がなかつたりしないようにすることも大切である。
- 4 言語活動の位置づけ【言語活動】**
言語活動の充実をはかり、児童生徒の思考力・判断力・表現力を高めるとともに、学習内容の理解を深めることが大切である。その際、次の4つのポイントが大切である。
① 各教科の中で、どのような児童生徒の姿を目指すのか（どんな言語表現の姿があればよいのか）、教師が明確にしておく。そして、その姿をモデルとして示す。
② 何のために、言語活動を取り入れるのか。どのような言語活動が、学習内容の理解につながるのか教師がとらえて、指導過程に位置づける。
③ 一人一人に、言語活動の場を保障する。実際に表現活動する中で、表現力を身に付けさせる。
④ 本時学習内容の理解を深めながらも、モデルとなる表現に近づくよう、言語表現に対するフィードバックも行い、児童生徒に意識させる。
- 5 スモールステップによる指導【スモー】**
学習内容を理解するために、活動をスモールステップ化することは非常に効果的である。その際、次の3つのポイントでステップを組むとより効果的となる。
① 教師からの一方的な指導としない。児童生徒の活動と教師の指導のバランスをとる。

- ② ステップが細かすぎると、児童生徒の思考力の育成を妨げることや、意欲を低下させることになる。子どもに考えさせることと教えることのバランスをとる。
- ③ ステップが固定化することは、学び方を学ぶことにつながる。しかし、学習内容や児童生徒の実態からステップを柔軟に変えることも必要である。

6 学び合いの活用【学び合い】

児童生徒同士の学び合いのよさは、次の5つである。

- ① 学習につまずいている児童生徒が、教えてもらうことで学習内容の理解を深めることができる。
- ② 学習内容を理解している児童生徒が、教えることで学習内容の理解を深めることができる。
- ③ 児童生徒一人一人が、学習内容を表現する活動を通して、学習内容の理解を深めるとともに、表現力を高めることができる。
- ④ 児童生徒が、相互評価することにより、短時間で理解の状況を評価できる。
- ⑤ 学習につまずいていて困っている児童生徒が、教えてもらえる・助けてもらえる安心感と存在感をもつことができる。

留意することは、次の2つである。

- ① ねらいと効果を考え、必要に応じて学び合いの活動を取り入れる。
- ② 児童生徒の相互評価に頼らず、教師自身が一人一人評価する機会を設ける。

7 変化のある繰り返しによる習熟【変化のある繰り返し】

繰り返しは、定着に効果的であるが、児童生徒は飽きてしまうことも考えられる。学習形態や学習活動などの変化をつけることで、意欲の持続を図るとともに、学習内容の定着・一般化を図ることができる。

8 一人一人の確実な見届け【見届け】

1時間の授業の中で、本時のねらいを達成することができたのか、一人一人評価する場をもつことが大切である。多くの場合、授業後半である。よって、後半に、学びを活かして自分で問題を解く、学習内容を自分の言葉で表現するなどの場を設ける。

【資料14】授業における学力向上のための視点

これらの視点を取り入れて授業研究会を行った。【資料15】は、その指導案と実際の活動の様子である。資料内のカッコ（例【レディ①】）の表記は、検証の視点のつながりである【資料14】【資料15】。

学習内容及び学習活動	指導上の留意点	実際の活動の様子
本時の目標 【指導内容】【言語活動】 (1) Can you~?を用いて、積極的に尋ねたり答えたりする。(コミュニケーションに対する関心・意欲・態度) (2) Can you~?の意味や用法を理解し、適切に使えるようにする。(言語や文化に対する知識・理解)		
1 挨拶および warm-up をする。 ○ 挨拶の中で、既習事項を用いて話したり質問したりする。 【レディ①】 ○ Basic Dialogue を用いて、ペアで暗唱活動を行う。 【レディ②】【学び合い①】	○ 明るく元よくあいさつさせる。 ○ 積極的に発表した生徒を称賛する。 ○ 協力しながら暗唱させる。 ○ 数ペア発表させる。 ○ 発表したペアを拍手で称賛する。	 Saito Basic Dialogue で暗唱活動
2 前時までの復習をする。 ○ 「アクションカード」を用いて口頭練習をする。 【レディ③】【スモ-①】 He can play soccer. He can use a computer.	○ カードを見せながら表現させ、can の意味や用法を思い出させる。	 カードをみせて対話(聞く、話す活動)しながら、前時の復習と本時の導入
3 本時の学習内容を知る。 【問題解決】 めあて Can you~? を使って、「できること」を尋ねたり、答えたり ○ 前時までの学習内容を使いながら導入する。 【スモ-②】 A: I can read this kanji. How about you? Can you read this? B: Yes, I can. / No, I can't. ○ 新出文法の口頭練習をする。 【スモ-③】 ○ ワークシートの問題を解く。 【スモ-④】	○ 生徒との会話の中から自然に Can you~? やその答え方の意味や用法を理解させる。 【変化のある繰り返し】 ○ 絵を見せながら、テンポよく口頭練習させる。 ○ 主語が you 以外の場合にも触れる。	 口頭練習後、問題を解いて確認
4 プログレスで会話の練習をする。 【スモ-⑤】【学び合い②】【見届け】 ○ 短い対話文を完成させる。 ○ 短い対話文の音読をする。 ○ 対話文を完成させる。 ○ 対話文を音読する。 ○ 英作文に取り組む。 ○ Can you~? を使って友達と会話する。	○ 短時間で集中して練習させる。 ○ 発表はペアで協力し、声をしっかり出させる。 ○ 発表したペアを拍手で称賛する。 ○ 机間指導をしながら、つまづいている生徒にはヒントを与える。 ○ コミュニケーション活動に入る前に日本語は使わないよう指示する。	 各自、短作文をつくり、友達と会話
5 まとめをする。 ○ 本時の学習内容を確認する。 まとめ Can you 動詞の原形~? Yes, I can. / No, I can't.	○ 板書を振り返りながら、基本文の用法が理解できたか確認する。	

【資料15】授業研究会の実施 指導案と実際の活動の様子 (12月 徳北中学校 第1学年 題材「Program 8」)

VI 成果と課題

1 成果

- さいと学研究班
 - ・ これまでのさいと学の学習内容をもとにしながら、探究型及びキャリア教育の視点を取り入れたことで、さいと学の新たな可能性を見出すことができた。
 - ・ キャリア教育の視点を踏まえた授業を実践したことで、学校で学んでいることが、将来の自分と結びついていると感じる児童が増えた。
- 英語教育研究班
 - ・ Saito Basic Dialogue の活用は、既習事項を定着させることに効果があった。
 - ・ 学力向上のための視点を意識することで、学習内容をしっかり身に付けさせる授業を組み立てることができた。
- 学力向上研究班
 - ・ ICT 活用の実態調査や具体的な活用事例の収集を行ったことにより、ICT 活用に関する問題点が明らかになり、具体的な手立てを講じることができた。
 - ・ ICT 環境が整いつつあり、教師の ICT 活用に関する意識が高まってきた。

2 課題

- さいと学研究班
 - ・ モデル校を使った研究で得られた成果を生かして、他校でも学校の実情に合わせて実践できるように、センターとして研究を推進していく必要がある。
 - ・ 昨年度までの反省を生かして、研究を推進してきたが、本年度で全て改善することができなかった。
- 英語教育研究班
 - ・ Saito Basic Dialogue の効果を高めるために、生徒相互の評価を行う時間をどう確保するか。
 - ・ 学力向上のための各視点の具体的な手立ての在り方を追及していく必要がある。
- 学力向上研究班
 - ・ 校種・教科等の特性を考慮した ICT 活用を進めるための工夫について検討する必要がある。

《研究同人》

所 長	竹之下 悟（西都市教育委員会教育長）		
主任研究員	向江 修一（穂北中学校）		
研 究 員			
<u>さいと学研究班</u>	<u>英語教育研究班</u>	<u>学力向上研究班</u>	
田村 智宣（銀鏡中学校）	水田 幸児（妻北小学校）	木下 浩利	（妻南小学校）
須本 康仁（妻南小学校）	岩切 敦（三納小学校）	上野美和子	（穂北小学校）
瀬之口忠二（茶臼原小学校）	下川奈緒子（穂北中学校）	瀬戸山なつ代	（都於郡小学校）
山下 義信（三財小学校）	日高恵里子（三納中学校）	松田 大志	（都於郡中学校）
門松 直子（妻中学校）		黒木 千穂	（三財中学校）
事 務 局	荒武 真奈美、日高 政志、山内 昭弘、高山めぐみ（西都市教育委員会教育政策課）		